

子どもたちが計画する交流宿泊学習

—相互の学習環境の特性（都市部の社会環境のよさ）を生かして—

複式プロジェクト

1 はじめに

本校複式学級では、「小人数の学級構成」「異学年集団による学級構成」などの特性を生かして、4年前より、本校の代用附属学校である広島県比婆郡東城町立帝積小学校と交流学習を行っている。本校では、バスや電車などの公共交通機関を使って自力登校している児童が多い。登校途中、子どもたちは、企業・商店・住宅団地・公共施設などの社会的な施設を目にしたたり、交通渋滞や騒音などの社会的な問題に直面したりしている。

しかし、帝積小学校では、東雲小学校にない学習環境が用意されている。子どもたちの中には、3キロの道のりを歩いて登校している児童もいる。登校途中、鳥のさえずり・色彩の鮮やかな草花・農作物など動植物のゆっくりとした生長の変化を肌で感じ取ったり、豪雪などの自然の厳しさにさいなまされたりしている。

それぞれの学習環境の特性を生かした交流をめざして、1年おきに宿泊場所を変えながら、集会活動・体験活動・合同授業・教科の学習内容を深め合う学習活動などを行っている。

昨年度は、本校の子どもたちが、自然環境の豊かな帝積小学校を訪れ、「イラクサ」「カキの化石」「カジカ」などを直接観察したり、笹もち作り・土鈴作り・梅とり・クワの実食べなどを体験したりすることができた。

（詳しくは、平成7年度研究図書「豊かな感性を育む」を参照されたい。）

本年度は、帝積小学校の子どもたちが、都市部にある本校を訪れた。両校の子どもたちは、①相手の立場や気持ちを尊重し合いながら、②自分たちで学習活動を計画し、③自己有用感や自己有能感を味わうことができた。その様子について以下述べることにする。

2 交流宿泊学習に向けての取り組みと実際

（1）運営委員会を中心とした集会活動への取り組みと実際

学年の代表（低学年2名、中学年2名、高学年4名）によって構成された運営委員会を中心に、各学年の願いや思いを調整し合いながら、集会活動の進行にあたった。

① めあての決定（意見の集約）

「帝積小の人と仲良く楽しい交流ができるようにする。」

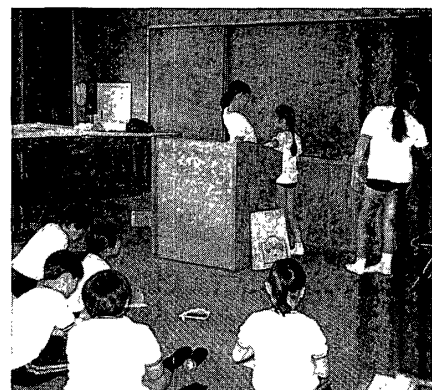
② 担当学年を中心に企画運営された集会活動

お迎え会（高学年中心による運営）では、仲良くなれるゲームをしながら、ジャンケンをして名刺を交換するゲームをす



ることになった。名刺の色を帝積小・本校低学年本校中学年・本校高学

年の4色にし、交流の幅を楽しみながら広げられるようにいろいろな工夫がなされていた。お互いの緊張感がとれ、「〇〇君、元気かい。」などの声が聞こえてきた。高学年の子どもたちは、4年間の交流の積み上げの成果と



して、身近な友達のような接し方をしていた。

夜の自主活動（中学年中心による運営）では、ハンカチ落としとフルーツバスケットのゲームをすることになった。また、ゲーム終了後、班毎にお菓子を食べながら茶話会をすることにした。（下の写真）宿泊グループの班では、低学年が多いので、準備が簡単で、ルールのわかりやすいゲームを見つけたそうと考えていた。準備を簡単にするためにフルーツバスケットのゲームで椅子のかわりに紙を用意していた。中学年の運営委員は、高学年へ指示する点で多少心配そうだったけれども、活動が始まると、堂々と語りかけ、スムーズに活動ができた。自信というすてきな宝物を得たのではないだろうか。

お別れ会（低学年中心による運営）では、猛獣の名前の数だけ集まって座るというもうじゅうがりのゲームをすることにした。同じ学校の人同士が集まら



（2）同学年相互のよさを生かした学習活動への取り組みと実際

各学級（複式低学年・複式中学年・複式高学年）の代表が、それぞれ帝積小学校の同学年の代表と連絡しあって、各学年毎の活動内容を決定した。

① 手紙・ビデオ・写真・招待状などによる学年交流

4年間にわたる交流の結果、個人的に文通をしている児童もいるが、各学級単位でまとめて手紙などを交換した。手紙を書きながら、昨年度の楽しかった交流を思い出して語り合っていた。また、帝積小学校からの手紙を読むなりに、「早く会いたいなあ。」「喜んでもらえるような交流にしたいなあ。」などのつぶやきが聞こえてきた。

たんぽぽつうしん

たいしゃく小学校との交流学習について

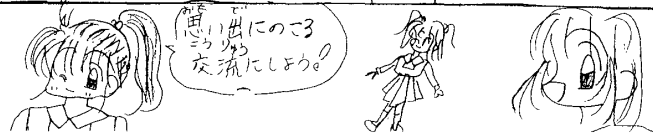
1. めあて
帝積の人と仲良く楽しい交流にする。

2. 日時

平成8年10月31日(木) 午後1時30分
～11月1日(金) 午後2時30分

3. 2日間(2日)の生活

時刻	31日(木)	時刻	1日(金)
13:30	帝積小学校の到着	6:30	おきき 荷物整理
13:40	おもいあひなみ	7:00	朝食
14:10	学年毎の授業・活動	7:20	掃除 布団移動
15:30	掃除の会	8:25	複式朝会(東豊ホール)
16:00	おもいあひなみ(紙飛行機)	9:00	学年毎の活動
17:00	夕食準備(宿泊グループ)	14:10	お別れ会
18:00	夕食	14:30	お別れ会
18:00	片づけ・入浴・布団移動		お別れ会
20:00	夜の自主活動		お別れ会
21:00	1・2年生はねる		お別れ会
22:00	4・5・6年生はねる		お別れ会
	東豊ホール(男女別)		お別れ会



ないようにするにはどうしたらよいかと考えていた。低学年の運営委員のルール説明のとき、高学年のお兄ちゃんやお姉ちゃんたちは、低学年の言葉足らずな所を非難するのではなく、やさしく質問することでルールの内容を明らかにしようとしていた。自分と同等として扱うのではなく、下級生を支え合おうとする姿勢は、縦割り活動のよさとしてあげられるのではないだろうか。

東雲小学校児童（中学年）の手紙

お元気ですか。きょ年はたいしゃく小学校にいかせてもらったときは、ささもちをつくったり、うめをとったりして、とても楽しかったですね。今年は、東雲小学校にきて、いろいろな楽しいことをしたりしましょう。どんなところにいきたいですか。たいしゃく小学校の近くは、しぜんがいっぱいあります。そして、東雲小学校の近くには、えんこう川や工場、マンションがあります。だから、たいしゃく小学校とちがうところをしらべたりします。楽しみにしてほしい。今パソコンをしています。中学年のみなさんは、パソコンをしたことがありますか。（後略）

② 子どもたちが計画し、自己活動する交流校外学習

発達段階に応じて、教科・領域の学習を深めたり、今までの学習成果を総動員したりしながら、両校の子どもたちが相互に連絡し合って学習計画を立てた。

自分たちで目的地（14時までに帰校できる範囲内の目的地）を選ぶこと、自分たちの力で公共交通機関を使いながら施設などを見学すること、交通費込みで、1,500円の予算内で、昼食や買い物を済ませることの3つの事項を、全学年共通の約束事にした。

低学年児童は、紙屋町・子ども文化科学館・もみじまんじゅう工場（右の写真）を見学することにした。JR・路面電車・バスというようにいろいろな交通機関に乗ることができるように行き帰りの行程も十分練られており、できるだけ自分の力で切符を買おうと計画されている。通勤電車に乗る体験は、帝釈小学校の子どもたちにとっても初めての体験だった。



また、昼食については、ハンバーガーショップで500円以内で各自が好きな物を選んで購入するようになっていた。注文をゆっくり聞いてくださるお店の人にお礼をいう姿や2年生が1年生に計算の仕方を教えたりする光景もあったそうだ。異学年のよさについても感じ取られた。

中学年児童は、交通科学館を見学し、本通り商店街にある100円ショップで買い物をすることにした。アストラムラインに乗る計画を立てたり、インターネットを活用して施設の概要やルートを確認したりしていた。また、昼食については、館内のレストランで各自の予算内で食券を購入して好きなものを選ぶようにしていた。



高学年児童は、子ども文化科学館・広島城・平和公園など自分たちの選んだ公共施設を自分たちの力だけで見学して、昼食をとって決められた時刻までに、決められた場所に集合するという計画を立てていた。6年生は、修学旅行のときも長崎の街を班ごとに、自分たちで目的地を決めて、地図を活用しながら現地に赴くという学習を体験をしている。携帯電話への連絡を厳守しながら、どの班も余裕をもって集合することができた。本校の6年生は、それぞれの班のリーダーとしての責任を感じて絶えず気を配った行動が見られた。また、帝釈小学校の子ども達は、地元の様子のわかる友達が側にいたので、子ども達の力だけで安心して学習ができたと話していた。

③ 学習を振り返り、心をつなぐ手紙での交流

「自分たちのためにいろいろ用意をしてくれたのだ。」「いろいろと気を使ってくれているんだ。」
「自分の力だけで見学できたんだ。」「自分たちも喜んでよらえる学習活動を考えたい。」など感想にあるように、子どもたちは、温かく支え合う他者（学習集団）とのかかわり合いの中ですすくと成長をするのだとわかった。

—— 帝積小学校児童（高学年）の学習後の手紙 ——

先日はとてもお世話になりました。複式の人と名刺交換をしたり、ジェンカをしたりしてホームステイでもとても気を使っていただきました。次の日の校外見学も広島市のいろいろな施設がどんなところでどんなものがあるのかよく分かりました。3時間という時間の中で何か所か見学して12時に集合場所に集まるという目安を立てて、自分たちだけの力で見学していくことはとてもいい経験になりました。また、帝積にくるときも仲良くしてください。

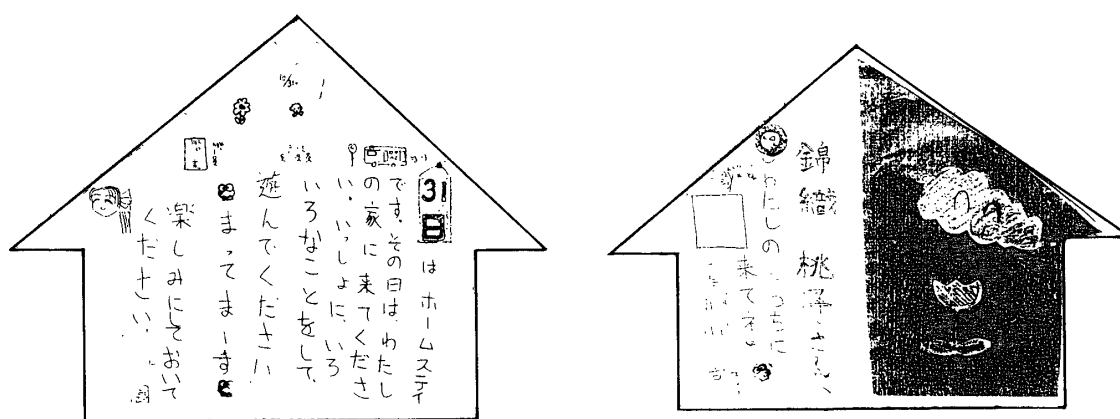
（3）生活環境の異なった友達とのホームステイ

帝積小学校との交流宿泊学習の日時が、10月31日と11月1日の2日間に決定した。帝積小学校3年生以上の児童が、本校児童（3年生以上）の各家庭で一緒に宿泊するホームステイの可能性について、保護者の皆様に複式学級通信「たんぼぼ」でお伺いした。幸運なことに帝積小学校の22人の児童の受け入れ先が決定し、実現の運びとなった。このホームステイの体験が今後異文化相互理解のためのきっかけになりはしないだろうか。

早速、児童をホームステイグループと宿泊グループに分けた。ホームステイグループの児童は、平素の暮らしと同様に登下校することにした。宿泊グループの児童は、新たに交流縦割り班を作って、学校で宿泊することにした。食事作り・布団の移動・銭湯での入浴などさまざまなことを体験した。

① 招待状作り

子どもたちは、国語の教科書（3年）を見ながら、どんな招待状をつくると気持ちよく安心してきてくれるかなと考えていた。一例を紹介する。



② 生活の違いへの気づき

ホームステイした子どもたち、ホームステイを受け入れた子どもたち双方が、自分たちの生活の違いにびっくりしたようだ。登下校中やホームステイ先での会話は、具体的なものがたくさんあるので、子どもたちは、「これ何なの。」「どうやって使うの。」「いつごろねるの。」など質問をたくさんしあったようだ。お互いに質問したりする中で、それぞれの違いやよさを発見していたようだ。

児童の感想文の抜萃

「ビルがとても高いのでびっくりしたよ。地しんの時こわいね。でも、高いビルがたくさんあるけど、何があるん？」と、Oさんが聞きました。「いろいろな会社の事む所やマンションがあるんだよ。たくさん家族が住んでいるんだよ。」と、わたしは教えてあげました。(中略)

Oさんは、学校へ通うのにかた道1時間歩くそうです。冬の日はずいときで、むねまで雪があるそうです。とてもたいへんだと思いました。広島でそれだけ雪がふると、バスも電車もストップしてだれも外に出ることができないと思いました。でも、きょ年たいしゃく小学校へ行ったとき、山や川がすぐ近くにあるし、自然がとてもきれいだと思いました。空気もおいしかったです。そこで、わたしは思いました。春から秋は、たいしゃくに住んで、冬だけ広島にいたらすてきだなあと思いました。

③ 家族同士の交流への発展

このホームステイは、子ども同士の交流から家族同士の交流へと発展しつつある。ホームステイ先での子どもたち同士が、すてきな夜を過ごすことができたのであろう。帝積小学校のお兄ちゃんが帰ったとき、ホームステイ先の妹さんが、「K君に会いたい。」と言いながら、大声でギャングァン大泣きをしていたそうだ。そして、K君に電話をかけたなら、なきやんだらしい。このように、家族の一員のような付き合いが始まり、家族で帝積を訪れた子どもたちもいる。お互いの文化を相互に理解し合うだけでなく、それぞれの家族を核として、交流が深まりつつある。

(4) 縦割り活動のよさを生かした学習活動への取り組みと実際

① 班で計画した食事のメニューと食事作り

宿泊班 1 班
一人分 400円 で考えます。
(デザート・おかしも含む)

夕食の計画	
メニュー	
たらこスパゲッティ	
くだもの	
買うもの	
たらこ(500円)	ホカリアエト
スパゲッティ(300円)	あめ
のり(200円)	
なし 2(400円)	
フルーツかんがめ(150円)	
準備品・フライパン・しゃもじ・フライ返し	
かんきり、ほうちよう、まな板、小ざら、つまようじ	
フォーク、はし	

複式交流給食のうちに、学校に宿泊するグループとホームステイのグループに分かれて、それぞれ活動の計画を立てた。

宿泊グループは、みんなで食



べたいものを一人が400円の予算でメニューを決定して、自分たちで工夫しながら食事を作った。たらこスパゲティ、ハンバーグ、カレーライス、おむすびとフルーツサラダなど班毎に工夫していた。複式では、毎年自分たちが育てたサツマイモを使った料理を工夫して作っている。この体験もあったためか、数人の高学年が中心になって、短時間でおいしそうな料理をつくっていた。高学年の子どもたちは、あたかも小さなお母さんのように、「おそくなってごめんね。」「もう少し待っていてね。」と下級生にやさしく言葉をかけていた。複式学級は相互扶助的な社会が形成されているのかもしれない。

② みんなで行った銭湯

子どもたちは、縦割りで風呂に入る機会や銭湯に行く機会は乏しいであろう。一人ひとりがお金を払って銭湯に行った。子どもたちは、嬉しさのあまり興奮して、脱衣所や浴槽で少しにぎやかになっていた。当然、他のお客さんもいる。そのとき、6年生が、「めいわくがかかるじゃろうが、しずかにせにゃ。」と言ったと同時に、急に静かになったそうだ。改めて、縦割りのすごさがわかった。6年生も2年前は、注意された側である。縦割りは教師がいなくても、最上級生を中心に、ある文化を創造することができる。縦割りの班は、ある雰囲気（学校文化）を継承するためのすばらしい学習集団ではないだろうか。

③ 6年生の布団に入り込む1年生

1年生にとっては、家族から離れての初めての宿泊であろう。とても不安だったろう。しかし、高学年のお兄ちゃんやお姉ちゃん存在は、不安を解消してくれた。驚いたことに、始めは、1年生同士が寝ていたが、朝になると6年生と1年生と一緒にねていたのだ。きっと、1年生が、「さみしいから、いっしょにねて」と言ってきたのだらう。低学年は高学年を慕っている。高学年は低学年を自分の妹や弟のようにかかわりがっている。同学年では、どうしても育むことのできにくい関係である。きっと、この6年生は、「自分は、〇〇ちゃんの役に立っているんだ。」と実感できていることだらう。

3 おわりに

学習環境の異なる学校相互の交流は、子どもたちにとって、学習活動の見通しがもてやすく、自分自身が育まれた環境や存在価値（自己有用感）を再認識する機会になりやすいと考える。子どもたちは、学習活動を計画するにあたって、「来てよかったなと思ってもらうためには、どんな活動をしようかな。」「こっちの学校でなければできないことは、どんなことがあるかな。」「どの学年・学級が担当するのが一番いいのかな。」など手順を踏まえて考えることができた。また、実際の活動の場では、「体験したことや知っていることを伝えよう。」「地域によって生活の様子がこんなにも違うんだな。」「喜んでもらえてよかったな。」「これからも手紙で連絡し合いたいな。」などの感情がわきおこったようだ。

しかし、交流が接待的になり、お互いに精神的に負担になるならば、長続きのしない交流になってしまうだろう。子どもたちの願いや思いが生かされ、子どもたちが主役で活動し、失敗体験や成功体験を繰り返しながら、交流活動の質が徐々に高まっていくことが望ましいのではないだろうか。また、他校と交流することを通して、本校の複式学級相互のかかわりあいも深まったのではないだろうか。人と競争することを第一とするのではなく、自分の能力をだしきって助け合うことを第一とする子どもたちの姿にたくさんのかことを学ぶことができた。同学年といるときには考えられない優しさと自信が感じられた。「できる」「できない」という分類がなく、一人一人が自分の持ち味を最大限に生かして今を充実させながら生きていると感じた。

大規模校や単式学級の学校でも、小規模校や複式のよさを取り入れた学習活動などについても研究が推進されるのではないだろうか。

（文責 松田芳明）